

2016 年 2 月

立教女学院短期大学紀要第 47 号（2015）抜刷

# 「節分おばけ」と結髪むすこの習俗

**The Folklore of Setsubun**

眞下美弥子  
Miyako MASHIMO

# 「節分おばけ」と結髪 of 習俗

## The Folklore of Setsubun

眞下美弥子\*

Miyako MASHIMO

### はじめに

「節分おばけ」<sup>(1)</sup>とは、節分の晩に厄よけのために異装をする習俗である。京都の花街の行事<sup>(2)</sup>として名高いが、戦前までは京阪を中心とする、関西圏の一般の人々の間でも広く行われていた。しかしこれらは家族間など個人的な場で行われた性格上、写真等の資料は限られており、体験した方も少なくなっている等の事情から、必ずしも実態は明らかではない<sup>(3)</sup>。

本稿はその実態の解明を試みるものであり、ここでは京都市周辺でこれを「お化髪（おばけ）」と書くのだと伝承されてきた点に着目する。その上で和装や結髪との関係の上からこれを探っていくこととしたい。

#### (1) 節分の結髪

京都市内の年配の方々に「節分おばけ」について伺い始めたのは、今から15年ほど前、2000年頃のことだった。当時70代から80代だった方々に伺うと、多くの方々から、「おばけ」は「お化髪」と書くのだという教示を受けた。またそれは、髪型に大きな特徴があるのだとも聞いていた。「節分おばけ」と結髪との具体的な関係をはじめて聞いたのは2002年、当時70代半ばの男性たちからであった。

①節分には翌日の立春からのスタートに合わせて、娘たちが新しい年齢に応じた髪型に結い替える習慣があった。桃割れ・結綿・島田などに結い替えた少女たちは、初々しさに大人っぽさも加わって、ひととき美しく見えたものだった。

②家では母と姉たちの髪を結うために、髪結いさんが定期的に通って来ていたが、節分には「おばけ」の変わった頭に結い上げたのを覚えている<sup>(4)</sup>。

---

\*立教女学院短期大学幼児教育科教授

①は中京の老舗商家の、②は上京の旧家の出身の方で、どちらも 1930 年代後半のことであったという。京都の場合、男性の結髪は中世末期にはすでに、床屋で行われていたことが知られる<sup>(5)</sup>。これに対して一般女性の場合には、古くは自ら結うか、または周辺の者の助けを借りて結っていた。それが江戸時代後半以降、技巧を要する髪型へと変化するに伴って、女髪結いと呼ばれる女性たちが一般家庭へも出入りするようになったという<sup>(6)</sup>。

周知のことではあるが結髪にはさまざまな型があり、それらは年齢や立場に応じて結い分けられてきた。その結い替えは多くの場合、元服式や成女式などの人生儀礼との関わりの上でなされるものであった。またそのような儀礼はとりわけ、吉日を選んでなされてきた。しかし 1930 年代後半の時点ではすでに、学校教育での入学や卒業が人生儀礼と重なっていた。十代の女性たちの場合には、当時の京都市内の各女学校の制服は洋装であり、日常着にも洋装が浸透していた。その一方で着物に対する正装としての意識は根強く、晴れ着を着用する際には結髪が必須であった。戦前の京都市内では正月と並んで季節の節目としての節分が重視されており、節分当日には「晴れ着」まではゆかないものの、普段よりも改まった着物を着用するのが慣例であったという。

京都は暦を暮らしの規範としてきた町であり、そこでは季節や時間の節目を意識し、「ハレ」の日にはこれを祝うという、めりはりのある暮らし方が大切にされてきた<sup>(7)</sup>。例えば京都市在住の年輩の方の中には、節分に結婚や見合いをした方が珍しくない。これは節分が方角の障りのない特別な一日であることと、翌日の立春が暦の始発にあたることから、幸先の良いスタートを目論んだものであった。京都市内では 1940 年頃までは、特定の髪結いが各家に出入りして髪を結うのが慣例であり、髪結いたちは顧客の立場や年齢に応じて髪を結い分けていた。このような状況を考えるならば、少女たちの結髪を担った髪結いが、節分当日に個人の成長に合わせて新たな髪型に結い替えていたことや、結い替えを必要としない成人女性たちには、あえて変わった髪型に結っていたこともうなずけよう。節分に女性たちが「おばけ」を楽しんだ背後には、着物文化が生きていたこととともに、このような髪結いたちの関与が大きかったことを忘れてはならない。

## (2) 旅順の髪結い

「節分おばけ」は戦前に中国に居住した日本人の間でも行われていた。今春、「節分おばけ」が新聞記事<sup>(8)</sup>になったご縁で、私は大阪市在住の渡部智子さんから次のような葉書をいただいた。

私は戦前の旅順で幼稚園までいました。家業は髪結いさん。節分は芸者さんたちが様々な衣装をしました。本物の匕首をしのばせた姉御風（写真 1）。紅白の丈長で飾った元禄髷。着物は大きな丸みの短い元禄袖。髷半分をぱっさり切られた間男髷。父も年増芸者（写真 2）、母と伯母はお姫様や町娘、店の職人や弟子さん達も学生服にマントで貫一。十代の人は老婆、



写真1 姉御風の扮装をした  
旅順の売れっ子芸者



写真2 「おばけ」の扮装をした渡部さんの家族。  
後列の背の高い芸者姿が渡部さんの父君



写真3 松竹歌劇のオリエ津坂になりきった  
渡部智子さん

三十過ぎの人はおさげ髪に短衣着物で少女風。ダンサーからは真白いドレスを借りたり。私は去年亡くなったテンブルちゃん、頭をくるくる巻いて御機嫌。また同年齢の男の子から三ツ揃えを借りてタバコ片手に大好きな松竹歌劇の「オリエ津坂」になりきってポーズ（写真3）。男の子は私の着物にリボンまでつけて写真をとる。

旅順は小さな街だし寒い所でしたが町をあげて楽しい一日でした。小学校から移った大連ではあまりそういう事はしませんでした。写真も沢山あったのですがリュック一つの引き揚げには持つことが出来ませんでした。80年近く昔の話です。

この手紙の主の渡部智子さんは、旧満州国の旅順で結髪を家業とする家庭に育ち、幼年期を当

地で過ごされた。その頃の記憶をしたためて下さったのである。「姉御風」「元禄髷」「元禄袖」等という、ここでの芸者たちの扮装は、現在も京都の花街の節分で芸舞妓たちが歌舞伎装束をまとい、お座敷で一幕を演じている情景と、近いものと考えられる。一方、一般女性たちが「お姫様・町娘・老婆・おさげ髪」等に化けたというのも、同時代の京の町の人々の様子とほとんど変わりが無い。このような旅順の日本人社会での「節分おばけ」行事は、おそらく当時関西地域で行われていた「節分おばけ」を、そのまま導入したことが想像される。そこでの一般の女性たちはおそらく、若いころの着物を出してきたり年輩女性から借用することで衣装を調達し、髪型は髪結いに依頼したり自分で結ったりもしたのだろう。和装であれ洋装であれ、当時の女性たちは服装ではもちろんのこと、髪型の上からも年齢や立場による制約を受けていた。このような状況だからこそ、たとえ一日でも別の立場へ転換できる「おばけ」が必要とされたのであろう。そこからは若返りや長寿の呪術として強い呪力をもつと信じられた「節分おばけ」のあり方が浮かび上がってくるのである<sup>(9)</sup>。

### (3) 四方参りと異装

続いて戦前戦後の京都での結髪と「節分おばけ」との関わりを紹介しよう。筆者が2010年に中京区の年配の女性たちに「節分おばけ」について伺った際<sup>(10)</sup>に、何人もの方々から「「おばけ」なら壬生に名物の美容師さんがいた」と紹介された。以下はその娘にあたる美容師さんから伺った思い出である。

わが家は先々代の祖母の時代からこの地に住んで髪結いをしてきました。もうかれこれ、100年ほどになります。祖母の頃は出仕事で、染屋の奥さんの髪を結ったりしていました。大正7年生まれ之母も、はじめは出仕事をしていましたが、戦時中にここに店を構えたと聞いています。

ここは壬生寺道のすぐ近くなので、節分にはお参りに、大勢の人が通ります。50年ほど前までは四方参りがはやっていて、「おばけ」をして連れだって歩く人を、たくさん見かけました。時代劇などの格好の「おばけ」をして見せて歩いて、自分も楽しむんですね。この店でも「節分やし、今日は髷を大きめに」とか、「島田っぽく」とか、「おばけ」の頭を頼みに来る人がいました。

今はどこもマンションになっていますが、この辺りは50年ほど前までは、染織業の職人さんが多く、活気がありました。近所には居酒屋を兼ねたすし屋があって、毎晩賑わっていました。そこにはお酌をする仲居さんが何人もいて、彼女たちは店から給料が出るというのではなくて、懐に入るのは客からのチップだけだったようです。だから節分の晩には舞妓や芸妓になるからと、うちに髪を結いにきました。彼女たちは衣装もそれらしく華やかに着飾っ

て店に出て、たくさんのチップを懐に入れたと聞いています。

約 100 年間、5 代にわたって京都で髪結いや美容室を営んできたという女性の回想である。彼女の祖母の代までは、出仕事と呼ばれる顧客の家での結髪を業とし、大正 7 年生まれの母も同業であったが、戦時下に命を受けて当地に店を構えたのだという。

この美容室は京都の四条通りに面しており、節分には大勢の参拝客でにぎわう壬生寺の近くにある。ここでは 1960 年代当時には四方参りが盛んで、さまざまな扮装をした人たちがいたことと、この美容室でもそのような「おばけ」の髪形に対応したことが述べられる。四方参りとは京都の町の東西南北の四方にある寺社——たとえば吉田神社・八坂神社・伏見稲荷大社・北野天満宮——を節分当日に一日で巡礼するものである。節分は一年に一度だけの方角に障りがない日とされ、この日に四方の寺社に参ることで大きな福を獲得できると考えられてきた。京都の人々にとって寺社参りは行楽を兼ねる場合が少なくない。その際に「おばけ」で仮装することは、日常から乖離するための絶好の手段でもあったのである。

さてここでもう一つ、「仲居」と呼ばれた女性たちが、節分当日に芸舞妓の姿になった様子についても述べられる。彼女たちは飲食店で「お酌」することを専門とした接客業の女性たちで、基本的に和装が多いが、特に決められた衣装や髪型はない。これに対して花街を拠点とする芸妓や舞妓は、髪型や着物に大きな特徴をもつ、いわば特権的な装束をまとっている。それは外部の者にとって真似ることの許されない装束であるが、節分の一夜だけは解禁になった。彼女たちのこのような変身は、本人たちにとっての日常からの乖離という以上に、店や客にとっての祝言となったものであろう。

#### (4) 仲居さんの髪型

接客業の女性たちの髪型についてはもう一つ、京都市の近郊である亀岡市の市街地で美容室を営んできた、田口晴美さんから詳しく伺うことができた。

ここに美容室を開いてから 40 年になりますが、2、30 年前まで「おばけ」は盛んでした。湯の花温泉の仲居さんや楽々荘（料亭）の仲居さんたち、それから今の図書館の裏手にも歓楽街があって、水商売の人たちが「おばけ」の頭を結いにきました。「おばけ」の頭はどんな大きな頭でも良いのです。「べたぼ」<sup>(11)</sup>を沢山使って、大きく結います。そこへ鹿の子を付けたりかんざしを挿したり、花魁のような頭にしたりします。とにかく大きく華やかに結います。化粧も誰か分からなくなるほど、派手にします。

当日のお座敷は決まった流派の踊りではなく、流派の不明な型のない踊りを踊るそうです。亀岡では「おばけ」をしたのは水商売の人たちだけで、素人はしませんでした。「おばけ」



の髪は、昨年まで結っていました。長く残したい行事ですね。節分の晩には私の家では、畑で採れた大豆を鉄の鍋で炒って、一升マスで撒きます。柊にイワシを挿して門口にかざしたりもします。

亀岡には近郊に湯の花温泉という温泉街があり、市街地にも大きな料亭があった。開いて40年になるという美容室には、昨年(2014年)まで「おばけ」の頭を結いにくる客がいたという。ここでの仲居さんは派遣されてお座敷でお酌を行う一方、芸者のように踊りを披露することもあったという。彼女たちは日常は一般的な着物を着用して、夜会巻などのアップの髪型で座敷に出る。それが節分にはさらに大きく華やかに結い上げて、化粧にも鮮やかな頬紅や口紅を厚く塗ることになる。

京都市内の年配の方々の間には、けばけばしい髪型や化粧をした女性を「節分のお化けのようだ」という形容が、今でも残されている。1960年代から70年代前半頃までは、京都市内の呉服関係などの商家の奥さんたちが、この亀岡の例と同様な「おばけ」の髪を結いになじみの美容室を訪れたという話を、複数の美容室で聞いたことがあった<sup>(12)</sup>。高度経済成長期以降、少女たちが節分に晴れ着を着用し結髪する習慣が消滅しても、着物を常用していた中高年女性の間では、個人的に「おばけ」が楽しまれてきたのである。これと同様の習慣は接客業の女性たちの間では、ほんの最近まで残っていたのであった<sup>(13)</sup>。

#### (5) 赤い鹿の子

今年(2015年)の1月、私は1980年頃に「節分おばけ」をしていたという女性とめぐりあった。京都の祇園の近くの和装と関わる家庭で育ったという上野新子さんは、高校在学中から運動会の仮装行列では歌舞伎の演目を企画し、節分には「おばけ」を楽しんでいたという。上野さんは1980年頃の節分に、当時通っていた美容室のオーナーに勧められて、「八百屋お七」の装束で京都のローカル局の主婦向けのテレビ番組に出演した。その時のビデオが保存されており、その中で美容室のオーナーであった年配の女性美容家は、「節分おばけ」について次のように語っている。

節分は長かった冬を抜け出る日、春を迎える息吹が感じられる日で、京都では大切にされてきました。節分の行事はどれもユーモラスで明るくて楽しいものです。節分はみなさん、日々はなさらないような突飛なことがしたいようで、そういうことが「おばけ」の始まりのようですね。

「おばけ」には形式はありません。例えば難しい家に嫁に行った女性が、お年越しに娘時代の赤の鹿の子を髪に挿したくて残しておく、という話を聞いたことがあります。たった一枚の布ですが、赤の色は年越しの色です。赤は福を呼ぶといわれる色でした。

ここ 10 年ほど前までは、意外と「お化け」が残っていました。おばあさんが若い方の格好をしたり、若い子が年配の着物を着たり。でもこの頃は案外、遠慮してハイカラ髷や袴をつけたり、アクセサリーや色彩で華やかにされます。「お化け」は昔の方が大胆でした。男性も厄除けで「お化け」をしました。

昔はおしゃれの中にもけじめがありましたが、今はハレらしいハレ也没有せん。

京都は「けじめ」を大事にして、鹿の子を着ける日も決まっていました。節分は特別な日で、鹿の子やかんざしで華やかに飾ったものでした。今はお正月と成人式に移ってしまいました。

今からおよそ 35 年前、1980 年頃の京都の美容師の感慨である。ここでは一般女性の「節分おばけ」の一つのあり方として、年越し——京都では年間の季節の循環の最終日にあたる節分も、大晦日と同様に年越しと呼んだ——のために取り置かれた、赤い鹿の子の例があげられる。赤い鹿の子は例えば、古典芸能の世界では「八百屋お七」「お染久松」などのヒロインに用いられるように、若い娘の特権ともいえる色であり、それは未婚であることと若さの象徴でもあった。旧家に嫁いだ女性が一枚の赤い鹿の子を髪に挿すことで、若く華やいだ娘時代に回帰するというこの話は、「節分おばけ」のあり方を象徴するものであろう。

鹿の子といえは戦前から 1970 年頃までの京都には、節分に幼児から小学校 3 年くらいまでの女児が、赤い鹿の子で飾られた「おちょぼ」と呼ばれる小さな髷を、おかっぱ頭の上に載せる習慣が残されていた<sup>(14)</sup>。戦前に小学生だったある女性は、節分の前になると「おちょぼ」が小間物屋の店頭を飾ったことや、節分にはふだん着よりも少し上等の着物を着て、これを頭に載せたことを回想された<sup>(15)</sup>が、それは年齢の上からはおそらく、十代の少女たちの日本髪 of 結髪 of、前段階に位置づけられるものであろう。この「おちょぼ」については、1960 年代後半に洋装 of 女児たちが装用している写真が残されており、当時はこれを装用することがすなわち「おばけ」と呼ばれたという証言もあった。小学校 of 女児たちのおかっぱ頭に載せられた小さな髷は、「節分おばけ」が結髪との関わりの中でなされてきた、最後の形ではなかったろうか。

## 結　　び

一般の人々による「節分おばけ」は、なぜ消滅したのだろうか。なぜ花街には残っているのだろうか——このような問いを、これまで幾度となく繰り返してきた。もとより着物文化 of 衰退によるものだという、漠然とした答えはあった。しかし今回の聞き取りを通して髪結いの関与 of 実態を、ある程度明らかにすることができたかと思う。

平安朝以来着用されてきた着物の周辺には、有職故実をはじめとする煩雑な「きまりごと」が



蓄積されてきた。それが障壁となって今日の着物の衰退を招いたのも事実であろう。しかしその「きまりごと」こそ、着用する人々や制作を担った職人たちの間で共有された、偉大な文化であった。戦前の「おばけ」は節分当日だけその「きまりごと」を取り払う習俗として行われたが、それは人々が時季に合った衣裳を身に付ける知恵を持ち、結髪を担う髪結いたちが、着用者の年齢や立場に応じた髪を結っていたからこそ、可能になることであった。このように考えてみるならば、現在も花街に「節分おばけ」が成り立つ理由も明らかであろう。

最後になるが、もう一つ忘れてならないことは、着物文化の中に占める結髪の大きさである。男性の冠や烏帽子の重要性については知られているが、女性においても髪型は個人の属性を示すものであった。結髪と今日の美容室での整え方の間には、本質的に異なる部分があり、日本髪の結い替えは、いわば「生まれ変わり」にも擬せられるものでもあった。一般の人々の間でなされた「節分おばけ」はこのように、現在とは異なった文化の上に成っていたことを確認しておきたい。

#### 〔注〕

- (1) 「節分おばけ」の呼称については、京都市内では単に「おばけ」と呼ばれる場合が多い。しかし近年では新聞等を通じて、節分の習俗として限定する「節分おばけ」の呼称が広まっており、ここでは「節分おばけ」の呼称を使用する。ただし本文中では適宜「おばけ」の呼称も使用することとする。
- (2) 祇園甲部・宮川町・先斗町・上七軒などの京都市内の花街のほか、東京都内等の花街でも行われている。
- (3) 朝日新聞 2004 年 1 月 30 日朝刊「お化け〜だぞ!？」。拙著（筆名・真矢都）『京のオバケ』（文春新書、2004 年）など。
- (4) ①②の聞き書きについては前掲『京のオバケ』p137～138、p149 でも紹介した。
- (5) 舟木家本『洛中洛外図屏風』などに描かれる。
- (6) 大原梨恵子『黒髪文化史』（築地書館、1988）。
- (7) 拙著『京のオバケ』（注3）など。
- (8) 『日本経済新聞』2015 年 1 月 30 日朝刊「冬から春へ化ける日」。
- (9) なお中国大陸の場合でいえば旧満州国の四平街の開拓村で、奈良県など関西出身の入植者たちが「節分おばけ」を行っていたことが知られる（眞下美弥子「節分おばけ」（『異界百夜語り』p169、三弥井書店、2014））。
- (10) 京都精華大学「精華おばけ会」の事業の一環として行った、京都市中京区三条周辺地域の「節分おばけ」に関わる聞き取り調査。引用部分を含むその成果については、『京都精華大学紀要』48 号（2016 年 3 月発行）に掲載予定である。
- (11) 「べたば」とは日本髪やアップの髪で、髪型を膨らませたり整えたりする際に土台として用いる、一種の付け毛。「毛たば」「すき毛」ともいう。
- (12) 拙著『京のオバケ』（注3）p138 をはじめとして、同内容の話は京都市内の美容室の複数の美容師から聞いている。
- (13) ちなみに京都市内の花街およびその周辺の歓楽街では、現在も「節分おばけ」が継続されており、芸舞妓以外の接客業の人々も「おばけ」の扮装をする。
- (14) 「おちょぼ」を製造販売してきたという野村かづら店（左京区岡崎）による。
- (15) 拙著『京のオバケ』（注3）p158。

- 付記 1 脱稿後、東京都在住の田中由理子さんから、往年の京都市中京区周辺の「節分おばけ」の様子を伺うことができた。田中さんは昭和 30 年前後に、長刀鉾を出す町内の実家に居住していた。当時町内にいた 20 代の娘さんたちは、普段は洋装だったが、節分には祇園町等にある髪結いで日本髪を結って、着物を着る習慣があったという。当時中学生だった田中さんは、これに憧れて髪を伸ばしたが、20 歳になった頃にはこのような習慣は消滅していた。それはだいたい昭和 35、6 年頃ではなかったかという。このことは本稿第 4 節で述べた、一般の人々の「節分おばけ」が高度経済成長期以降に消滅したことと、符合するものであろう。
- 付記 2 本稿第 2 節で紹介した大阪府在住の渡部智子さんのお宅へは、脱稿後の 11 月末にお訪ねした。そこで思いがけず写真を拝見し、複写もさせていただくこととなった。これらは終戦の前年に、髪結いのお弟子さんが郷里の高知に持ち帰ったもので、戦後に渡部さんのもとへ戻ったものだという。貴重な機会を頂戴し、厚く御礼申し上げます。

